

## 国内経済情勢

### 概観

商品市況は依然軟化を続けており、とくに鉄鋼などここへきて下げ足が目立っている。それにつれて、業界の底流には先行き警戒観が深まり、生産調整の動きもこのところかなり強まってきた。設備投資についても、先行きの計画には慎重な面が加わりつつあり、機械受注の減勢持続などにそれが現われている。この間、国際収支面では、経常収支の赤字がなお続いているが、貿易収支の改善歩調はかなりはっきりしてきた。このように、大勢としては、景気調整は一段と進展をみせている。

しかし、目先の状況としては、必ずしも順調だとはいいがたい面も目立つ。生産はなお高水準のまま一高一低の域を出ず、はっきり落勢が表面に出るまでに至っていない。需要ひいて出荷の基調には変化のきざしもないではないが、消費財は依然強く、設備投資関連財でもまだ好況の余勢が続いている。

ただ鉄鋼にみるように、調整への適応が遅れた部門では、滞貨がふえ続け、金繰りにもひっ迫が加わるなど生産への圧力が強まってきた。このような動きから、今後自律的な生産調整が広がって

いくかどうか、注目されるところである。

### 商品市況の軟化続く

最近の商品市況をみると、セメント、上質紙など2、3の品目はおおむね堅調を持続しているが、大勢は依然軟化を続けている。とくに鉄鋼は、製品在庫の増加が目立ち、ほぼ全面安商状をみせている。木材、化学、紙の大部分なども、総じて軟調を深めている。この間、すでに大勢底値圏にあるとみられる繊維、非鉄には、生産調整の強化も響いて、最近ではやや下げしぶり商状もみられる。

このような商況を映じて、本行卸売物価(食料を除く)は続落(5月-0.5%、6月上旬-0.2%)している。しかし、小売りおよび消費者物価(東京)は、食料、繊維の値上がりにより依然騰勢(5月、それぞれ+2.3%、+1.2%)を続けた。

### 生産の大勢減勢ながらなお高水準

5月の鉱工業生産は、4月減少(-3.6%)のあと、+2.3%(速報)と再びかなりの増加を示した。業種別にみると、鉄鋼、非鉄が減少したほか、石油も定期修理の繰上げなどからかなりの減産となったが、消費財、機械、窯業、化学などは増加が目立った。4、5月の動きをならしてみれば、大勢は減勢をたどっているものの、目先き高水準が続いている。

4月の鉱工業出荷は、-2.9%とかなりの減少を示し、とくに投資財の減少が目立ったが、反面

消費財は増加を続けている。ただ当月の動きには、前月急増(大型機械)の反動などもあり、実勢は数字が示すほどの減少とはみられない。この間、従来著しい増勢を続けてきた生産者製品在庫は、3、4月にかけて増勢頭打ちないし微減を示した。

最近における最終需要の動きをみると、設備投資については、機械受注の減勢が続いており、機械販売額は、前年を2割近く上回ってはいるものの、その増勢には頭打ちがみられる。個人消費は、伸び方こそやや鈍ってはいるが、なお堅調を維持している。

生産がそれほどの減勢を示さないのは、需要に大きな減退がみられないことや、企業の採算面の事情、競争の激しさなども影響している。しかし、このところ鉄鋼、非鉄、紙などには、さすがに生産調整を本格化する動きが広がっており、成り行きが注目される。

#### 貿易収支の改善歩調続く

5月の国際収支は、経常勘定では45百万ドルとほぼ前月並みの赤字を示した。一方、資本勘定はユーロ・ダラーの流入や米国農産物借款の受入れなどから75百万ドルの大幅受超となったため、総合勘定は27百万ドルの黒字となった。貿易収支は、輸入期であることを考慮すれば、徐々に改善の方向をたどっているものとみられる。輸出入の先行指標からみても、当面、輸出の好調と輸入の落ち着き傾向が続くものと思われる。

輸出は、鉄鋼、食料、機械などの増加が著しく、5月の輸出額(為替ベース)は前年同月比14.8%の増加を示した。信用状や認証額でみても、前年を1.5～2割方上回る好調を続けている。た

だ、こうした伸びも、主として米国向けに集中しており、また換金輸出によるものも多いことは見のがせない。

一方輸入は、繊維原料やくず鉄などの減少を中心に落ち着いた動きを示し、5月の輸入額(為替ベース)は前年同月比11.6%の減少となった。信用状や輸入承認額をみても、前年を2～3割方下回る動きをみせている。

#### 銀行貸出の抑制続き、企業金融は繁忙持続

5月の銀行券は、467億円の還収超となった。平均発行高でみても、前年同月比+16.5%(前月+17.7%)と増勢鈍化傾向が続いている。

5月の全国銀行貸出は1,098億円とかなり大幅な増加となったが、増加額は前年同月(1,301億円)を大きく下回り、貸出抑制基調が続いている。とくに都市銀行では、資金事情の悪化を背景に、選別態度がとみに強化されており、貸出金利の上昇もやや目立った。

一方、企業の資金需要は引き続きかなり強いが、業種ないし企業によっては、区々の動きが目立っている。総じて調整の遅れたところでは、引き続きさし迫った資金需要があとをたたないが、生産の調整、業容の縮小が進んでいるところでは、しだいに落ち着きがうかがわれるようになってきた。金繰りがひっ迫してきた企業では、下請けに対する支払を一段と長期化し、また賞与の分割払い、社内預金の利用など種々の対策に腐心している。

なお、中小企業のコレは、専門金融機関の比較的円滑な融資もあって、総じて大企業ほどの繁忙状態ではない。不渡手形の発生率も、引き続き低水準のうちに推移している。